

描いた絵の数々が築80年の空間におだやかな響きを奏でる

神奈川県葉山町 真砂邸



[上2点]「水鳥や山鳥が20種類くらい来るよ」。庭は小さな生き物たちが集うオアシス。二手に分かれたアプローチの右側は自宅、左側は夫人のアトリエ「Afa」へと続く。[右]設計当初と位置から変わり、前庭向きになった玄関。「もとはテラスだったんじゃないかな」。[左]リビングの暖炉。ネイティブアメリカンのグレートスピリットに感銘し、ネイティブアメリカンの地に宿る魂の輝きを描いたという水彩画「Leaves」を飾る。



海へ還る川の流れを眺めながら、草木が茂った前庭へ向かうと、長いアプローチの先に、ようやく家の姿が見えてきた。通りから奥まった場所のせいなのか、静かな庭はどこか楽園的で自由な気配が漂う。そして家のなかにも、同じような気配が広がっていた。

家の主人・真砂秀朗さんは、画家であり音楽家でもある。アジア、アフリカ、北アメリカ中西部などを訪ね歩き、風土のなかから生まれる音色やリズム、スピリットに触れながら、自分の心に響いた世界観を絵や音楽に表現してきた。夫人の三千代さんは、手織布



暖炉のインテリアに似合う抽象画。秘められた象徴性が輝きだす。

や風合い豊かな布を使う衣作家で、家にはそれぞれのアトリエもある。

「この暮らしはまた未完成だよ」

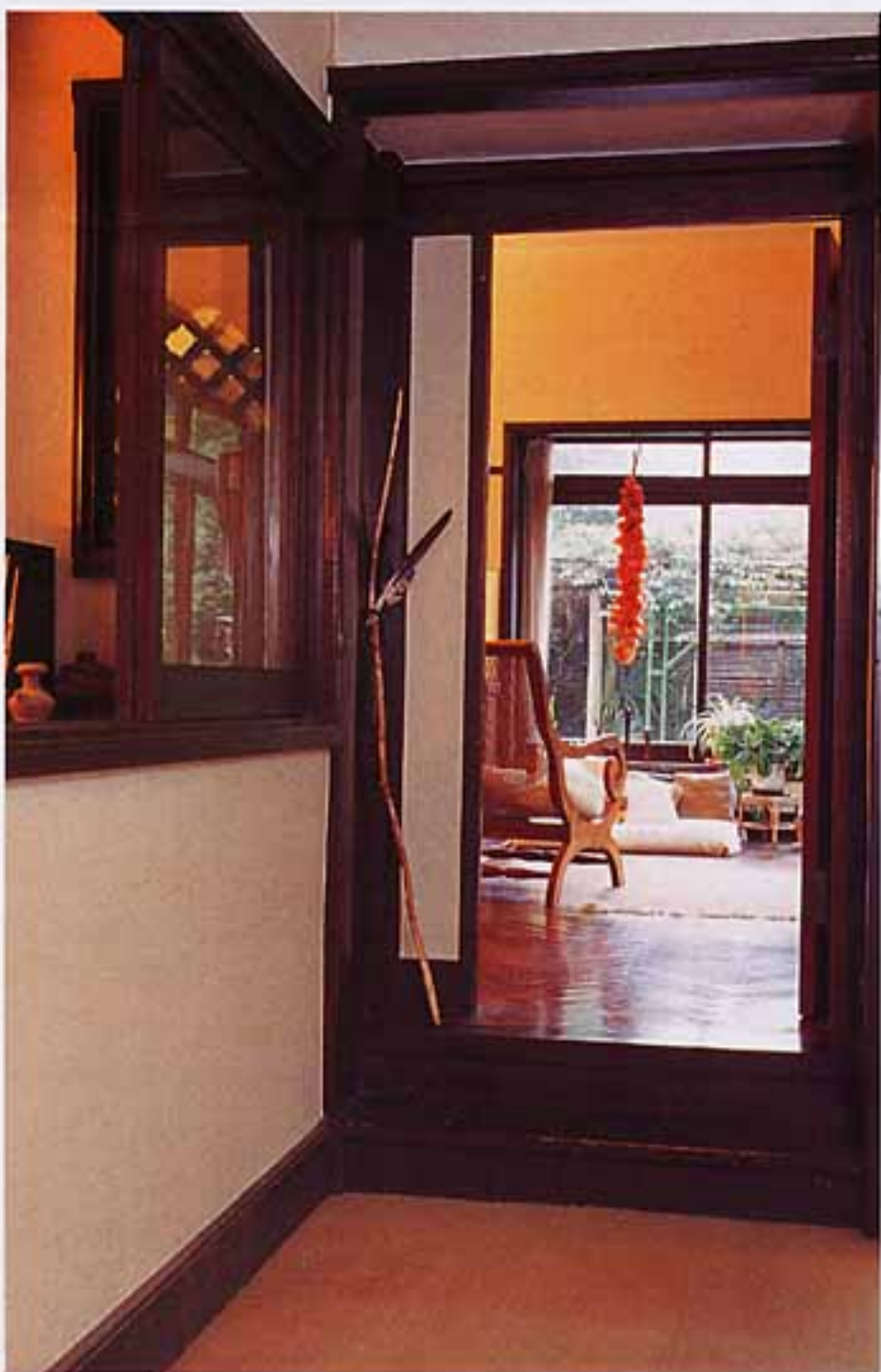
十年ほど前から住むこの家は、昭和初期の建築というから築八十年に近い。ある侯爵の別荘として建てられ、三回ほど住人が変わった後、真砂さんが借りるようになった。

昭和モダンを感じさせる設計は、アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトの愛弟子として知られた遠藤新によるもので、落ち着きと品格は今も変わらない。その後、改築されたところも多く、建築当初と玄関の位置が違っていたり、もとはなかった和室が増築されていたりする。

「自分たちで住みやすくしようとする」と、オリジナルの形が見えてくる。まるで、当初の家に戻そうとしているみたいだ。

開放的な別荘のつくりは、家のなかからも周囲の自然を感じながら暮らせるもの。二十年以上前になるが、真砂さんはしばらくバリーに滞在したことがあり、帰国後も葉山で培ってきたライフスタイルはどこかリゾート的。この家本来の心地よさ、住みやすさに対して、素直に心が開くのだろう。

長い時を刻む空間には、旅に触れて描いた水彩画やシルクスクリーンが、おだやかに馴染み、時代を超えて寄り添っている。はじめに庭を歩きながら感じたあの気配は、家と住人との織りなす息づかいだったのかもしれない。



[上]リビングの大きな出窓が、外の気配を呼び込む。緑に染まった庭をバックに置いた水彩画はタイトルが「ピンクとブルーに染まる時」。
 [右]生き物たちが水場を求めてやってくる。
 [下]インディアンフルーツの音色を聴きながら、ちょっとまどろむのに気持ちいいコーナー。生成りや竹染めの布のクッションもやさしい肌触り。
 [左]玄関ホールからリビングを見たところ。
 [次ページ上]同じく玄関ホールからダイニングルームをのぞく。玄関側の出窓に、クラフト作家の作品が並ぶ。写真手前の木の器は三谷龍二さん作、編んだ籠(器)は真木雅子さん作。岩絵を思わせるシルクスクリーンの絵は真砂さんの新作「songs」。



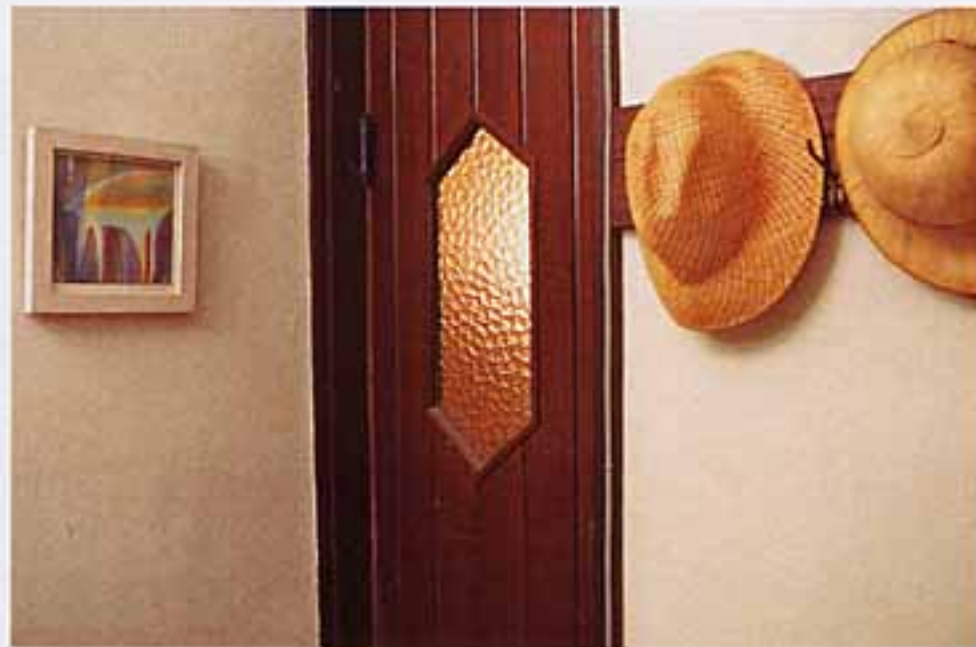


「AWA」レーベルを主宰し、
これまでに9枚のCDを出
している。「インディアンフ
ルートは音色を最も大切に
してきた楽器」。木の笛の1
オクターブに込められた美
しい音色が心をとらえる。

年月を経た空間に、
思いを刻み、
時が重なる。



[上]描いた絵にはひとつひとつ思い出があって、ふ
とその時代に呼び戻される瞬間がある。廊下にかか
ったこの絵も、バリのウブドゥ近くのリヤタンとい
う音楽の村に滞在していた頃のもの。[左]ダイニン
グからは前庭と裏庭のどちらも眺められる。下部が
曇りガラスになった室内窓がどこか懐かしい。



[右]木は古びるのではなく、味わいを刻むもの。丸くすり減った階段の角や手すりも、この家のおだやかな空気をつくっている。[上]廊下のドアの何気ないデザインや帽子掛けに、昭和モダンを垣間見る。[下]秀朗さんが自分で壁に漆喰を塗り、改装したアトリエ。「ここが玄関だったと、床を剥がしてわかったよ」。あとから設けられていた収納などを取り払い、床に板を足して、仕上げにココナッツマットを張った。白い壁には、昨年滞在したハワイでインスピレーションを得た5連作が掛かっている。「自然のなかで見える風景の悦びに、内面から湧いてくるものがあって」旅から帰って一気に描くことも多い。



この春から真砂さんは一反ほどの小さな田んぼを借りて、若い仲間たちと無農薬の米づくりを始めた。きっかけは地元のお寺が行うライブに招かれたこと。インディアンフルートを奏でた境内の裏には、三十年間遊んだままの棚田があった。

「手で耕すしかないところだけど、見方を変えれば、究極に楽しめる場所。こういう水場に近い谷間に、縄文人は最初の田んぼをつくったんだから」。

これまでも毎年、田植えと稲刈りを手伝いに千葉まで通っていたそう。自分の田んぼをもつことはごく自然なことだった。

「水田には人間と自然が折り合う美しさがあるでしょ。この棚田も谷間に広がる美しい庭みたい」。

田んぼ仕事の後は、身も心もすべてのバランスがとれた状態になって、気持ちよく絵を描いたり、笛を吹いたりできるそう。それは二十年前、身近に見たバリの人の暮らしにも重なる。

「バリや北米サウスウエストのネイティブな生き方のなかで出会った、大きなコンセプトやスピリットは、人類が太古から脈々と受け継いできたもの。それが自分のなかにもあるから心に響く。そういう普遍的な要素を、絵や音という抽象言語を通して、自分なりに伝えていきたい」。

家だけを受け継ぐのではなく、暮らし全体の成り立ちを見つめた深い視野からの再構築。日々の根底に、表現者の強いビジョンがあった。



1枚の絵の奏でるリズムが、部屋の内へ外へ共鳴の輪を広げて。



[上]以前の住人によって増築されたという和室。前庭に面して広縁があり、外の景色が室内を彩る。入口の壁の絵「Autumn Stream」は、ネイティブアメリカンの祭壇に供える飾り物をイメージしたもので、四季を連作にしたひとつ。和の空間に絵で季節を取り入れた。[下]床の間にいろいろな民族の笛とシルクスクリーンを飾った、この家らしい自由なしつらえ。広縁に置いたのはバリの人々が使う竹製の打楽器ティンクレック。

Photo/Mizukoshi Yoshimasa